

# 誇りを乗せ 放つ白球



秀明英光一大宮東 | 失点に抑え完投した秀明英光の小川一(県営大宮) (柿沼美咲撮影)

## 秀明英光・小川1失点完投

## 8強出そろう

### 第105回全国高校野球

### 埼玉大会



⑨第9日⑨

### 攻略できず 打線沈黙

**県営大宮**  
 ●大宮東 Bシードの一角が8強入りを懸けた一戦で、安打1得点と打線が沈黙。三回に失った3点が最後まで響いた。この日の先発には、4回戦で完投したエース富士ではなく、背番号18の近藤を起用。飯野監督は「甲子園までの長い道のりを考えると、なるべくエースの登板を減らしたかった」と理由を話した。近藤は伸びのある直球を軸に二回まで無失点に抑えた。だが三回2死、二塁から3連打を浴びて3失点。大量失点を防ぐため富土が登板し、ピンチをしのいで援護を待たされた。だが、松本の本塁打で

先制した二回以降、スコアボードに刻まれるのは「0」。飯野監督は「序盤の3失点は許容範囲。終盤までには追いつける」と選手たちを鼓舞したが、相手投手の変則フットワークに苦戦。八回2死満塁に桑野主将が「絶対に一本を出す」と打席へ。内角の変化球を捉えたものの、左翼手の好守に阻まれた。5回戦で夏の幕が開き、悔しさのあまり涙を流す選手たち。桑野は後輩たちには「甲子園出場の夢をかたむけてほしい」と思いを託した。(中野春夫)



秀明英光一大宮東 2回裏大宮東2死、松本が先制の左越え本塁打を放つ。捕手山崎一(県営大宮) (中野春夫撮影)

# バック信じ変幻自在

## 光る汗

り、試合を締めくくった。

要所でスライダーを駆使し、「打たせて取るのがモットー」と小川。スリッパオーターとサイドの変則なフットワークを使い分け、大宮東の右打者を翻弄(ほんろう)した。

5月には右肘を疲労骨折し3週間投げられない日が続いたという。両親の協力を得て毎日通院し回復に努め、集大成のマウンドに立つ。「(親の)おかげで夏に間に合った」と感謝の思いが募る。

準々決勝で対するは強力打線の花咲徳栄。小川は、切確球庫(せつさくたぐら)としてきた大石、小島、豊田の3年投手陣の名を挙げ、「(し)は(し)チャーが豊富。自分も(ま)まで通用するか確かめたい」と投手力を武器に初の4強へとチームを押し上げるつもりだ。(中村未来)

ゲームセットの瞬間、両腕を突き上げた。秀明英光の先発小川が、3試合連続で2桁安打の大宮東打線を被安打2、1失点に抑える好投で、チームを12年ぶりの8強に導いた。公式戦で初めて9回を投げ抜き、「最初はどうかと思ったけど、バックを信じて自分のピッチングができた」と背番号11は誇らしげだった。

最大のピンチが3-1の八回に訪れる。安打と四球で2死満塁。「(こ)ですかさず捕手山崎が駆け寄り、「おまえなら大丈夫。笑顔で投げる」と頬をたたかれた。相手の3番打者に投げた5球目、スライダーを捉えられたが、左翼手矢野がタイムアウトで救った。ヤマ場を乗り越え、九回は全て飛球で打ち取